京都新聞・平成２６年８月２３日掲載(取材共同通信社)

修験者の道「大峰奥駈道」

「歩いてもらい 継承を」

奈良・吉野山と和歌山・熊野三山の南北約120キロを結び、標高千～2千メートル近い険しい山々の尾根を歩く修験者の道「大峰奥駈道(おおみねおくがけみち)」は、熊野古道とともに世界遺産に登録された。聖域で道も険しいため、観光向けのPRは控えめだが「人が歩かなければ道も文化も守れない」と、祈りの伝統の継承に関係者が取り組んでいる。

「ここは『かつえ坂』。『かつえる』は空腹の意味。目的地が近づき、おなかがペコペコになったことに由来します」。6月下旬、語り部と呼ばれるガイド岩本泉治さん(59)が、奈良県十津川村の玉置山(標高1076メートル)の大峰奥駈道を案内してくれた。1300年以上前、役行者が開いたとされる修行の道。神仏が宿るとされる岩や山頂を巡り、玉置山とその山頂近くの玉置神社も修行場の一つだ。

かつえ坂から神社に近づくと、スギ林の間から差し込む日光が神々しさを感じさせる。険しい道の中で、比較的気軽に歩ける数少ない場所だ。岩本さんは「植物好きの人は興奮する場所ですよ」と豊かな自然の魅力も付け加えた。

岩本さんは、4歳のころから修験者の祖父に連れられ、何度も歩いた。「ほら貝や錫杖(しゃくじょう)の音が響き、日常と非日常の境を歩く魅力を感じた」と振り返る。

岩本さんらガイドが所属する「十津川鼓動の会」によると、尾根伝いに住宅や畑がある眺望が美しい熊野古道・小辺路(こへち)の果無(はてなし)集落と比べて、奥駈道を訪れる人は少ない。その険しさと神聖さのため、あまりPRされていなかったという。

岩本さんによると、奥駈道の南側は、ほとんど人が歩かなくなった時代もあるという。「聖域の雰囲気は守りつつ、一般の人を受け入れるのが大事」と考え、マナーのよい登山客にもっと来てもらおうと、奥駈道の山岳ガイドグループを立ち上げようと計画している。

寺社側も伝統や文化を伝えようと取り組む。玉置神社は世界遺産登録10周年の今年から、神社に泊まり込んで祈る「参籠(さんろう)」体験を始めた。吉野山・金峯山寺(きんぷせんじ)では、十数年前から一般向けの奥駈修行体験を続けている。同寺や高野山・金剛峯寺(こんごうぶじ)は6月、奈良県とともに、吉野山から奥駈道の北側約12キロを経て、高野山までを走るトレイルランニングを開催。白い服の着用を条件にし、聖域に配慮した。

イベント前の会見で、金峯山寺執行長の田中利典さん(58)はこう話した。「人が歩かなければ道は消え、多くの人が使うことで道になる」

「大峰奥駈道」を指し示すガイドの岩本泉治さん＝6月、奈良県十津川村

やぶに埋もれた道 整備

奈良県側の「大峰奥駈道」で、道の補修に使う間伐材を運ぶ沖崎吉信さん(手前)と川島功さん＝6月

大峰奥駈道の整備を続ける登山愛好家団体「新宮山彦ぐるーぷ」(和歌山県新宮市)が今年6月、保全活動を始めて30年を迎えた。今でこそ世界遺産の一部として知られるが30年前はやぶに埋もれた道だった。

「昔は20キロ背負って登ったんだけど、最近はさすがにつらくてね」。山彦ぐるーぷが管理する行仙(ぎょうせん)宿山小屋までの高低差約200メートル、1時間近い行程。急な山道を事務局を務める沖崎吉信さん(66)は10キロの土のうを背負って登った。

メンバーは自分の荷物のほかに、小屋に補充する食料や毛布、土のうなどを背負い足早に登る。道幅が数十センチしかないような区間も登り終えると、ヒルに足をかまれていないかを確認。倒木の撤去や雑草の刈り取りのほか、間伐された木を持って山を登り下りし、道の補修をする。

奥駈道は、世界遺産として登録された参詣道の中でもとりわけ厳しい修験道。総距離120キロのうち、大峰山系の尾根をたどる難所だらけの約90キロの道は、ベテラン登山家でも5日かかる。古くは7世紀から利用された道だが、国家神道を推し進めた明治政府下での廃仏毀釈(きしゃく)や修験道廃止のあおりで衰退。奈良県下北山村からの南半分約45キロは宿泊施設もなく人が入れない時代が長く続いた。

山彦ぐるーぷは1974年、登山愛好会として発足。奥駈道の整備を目指した行者の遺志を継いで84年、前代表の玉岡憲明さん(88)が「修行に集中できる環境をつくりたい」と活動を決めた。当時、高さ2メートルを超えるクマザサが生い茂り、道を切り開くだけで3年かかった。メンバーが3年かけ少しずつ木材を運び、90年には30人以上が泊まれる行仙宿山小屋を建てた。「なるべく自然に近い状態にしたい」と、手間がかかっても道の舗装には木材を使った。

そうした活動で復活した奥駈道は2004年、世界遺産に登録。今も毎週のように山に入り、活動回数は1770回を超えた。代表の川島功さん(73)は「私生活でも精進料理を貫く厳しい修行をする行者、仁王になった家族の供養登山をする方、そうした人との出会いが財産だ」と魅力を語る。

メンバーは和歌山県を中心に約[illegible]人。平均年齢は70歳を超え、人手が必要な作業は厳しくなりつつある。それでも川島さんは「一人一人できることをすれば良い」と活動を続けている。